

| | |
|---|--|
| 19世紀および現代イギリスにおけるラファエル前派主義の評価と帝国主義 | |
| 江澤 美月 | 比較社会文化学専攻 |
| 期間 | 2008年1月1日～2008年1月9日 |
| 場所 | イギリス ロンドン市内 |
| 施設 | 1月2日～1月3日 British Libraryにおける資料収集 1月4日 British MuseumのJapan Roomと他のアジア諸国に関する展示室見学、 British Libraryにおける資料収集 1月5日 British Libraryにおける資料収集 1月6日 Tate BritainにおけるMillais展鑑賞 1月7日 British Library NewspapersおよびBritish Libraryにおける資料収集 |

1. 海外調査の目的とこれまでの研究経過

本海外調査は、ウィーン体制下のイタリア、ヴィクトリア朝のイギリス、明治期の日本において、ポストコロニアリズムの立場から、ラファエル前派主義とナショナリズムの相関性を論じようとする博士論文執筆のための基礎資料として、イギリスにおけるラファエル前派評価を収集することを主たる目的とする。ラファエル前派の中心人物として筆者は詩人かつ画家であるDante Gabriel Rossetti(1828-82)に注目しているが、Rossettiが文学、美術の両界において盛んに紹介されるのは、明治20年代後半から30年代中頃である。

このことから2007年の夏に行われた日韓シンポジウムにおける口頭発表では¹、日本とイギリスという二つの帝国の植民地政策による文化の序列化を背景に、日本の民間により私的に推進されたRossettiの受容に象徴されるラファエル前派主義の受容が、どのような意味をもっていたのかを上田敏(M7-T5/1874-1916)を中心とした日本のラファエル前派に注目し論じた。Rossettiの*Poems*は1870年に上梓されるが、Robert Buchanan(1841-1901)により1871年、1872年と二度にわたり大英帝国の性規範に反するものとして批判され、BuchananはRossettiの詩の制度攪乱性を彼個人の問題にとどめずラファエル前派全体の問題へと引き上げている。当該発表では、上田敏が、Buchananの批判を知りつつも自覚的にRossettiに高い評価を与え、大英帝国の価値観に対し攪乱性をもつラファエル前派主義を導入することによって大英帝国ひいては明治期日本のナショナリズムにも対抗しようとした可能性を論じた。

2. 海外調査における着眼点

明治期日本のラファエル前派主義を考察する上で基礎となるのは、ヴィクトリア朝イギリスのラファエル前派評価、およびその背景にあるウィーン体制後のイタリア情勢である。本海外調査はその意味において大きな意義を持っていた。それはBritish Libraryおよびその分館British Library Newspapersにおいて日本国内では入手困難な当時の書評、絵画評など一次資料に触れ得、批評のおかれた社会的コンテクストを確認出来たからである。本調査ではRossettiが詩人かつ画家であることに着目し、彼が詩画の両側面において追及したDante研究に関する評価、すなわち彼がDante(1265-1321)の*La Vita Nuova*(c.1293)を翻訳した*The Early Italian Poets*(1861)、*Dante and His Circle*(1874)の書評、およびDanteに関する絵画評を中心に収集した。またTate Britainで会期中のMillais展から現代および19世紀のイギリスにおけるラファエル前派評価を確認し、当時ラファエル前派の絵画として批判を受けたMillaisの*Christ in the House of His Parents*(1849-50)を契機にRossettiの絵画との類似および相違点を考察した。また同時期に公開されたRossettiの*The Girlhood of Mary Virgin*(1848-49)および*Ecce Ancilla Domini*(1849-50)の絵画評を収集し、ラファエル前派活動においてRossettiが占める独自の位置を考察した。またBritish MuseumではJapan Roomを中心に他のアジア諸国の展示との比較を行った。

3. 海外調査の成果と今後の課題

(1) ラファエル前派主義とイタリア

—RossettiのDante研究を中心に—

結成当初のラファエル前派が、ラファエル以前すなわち中世イタリアの清新な画風を標榜することにより、ラファエルの技法を最高のものとしたロイヤル・アカデミーの絵画に対する攪乱性を有していたことはよく知られているが、そのこととRossettiのDanteを中心としたイタリア古詩の翻訳、およびDanteに関する絵画作成は、従来関連付けられることが少ない。その理由の一つとしてラファエル前派結成期のメンバーであるWilliam Holman Hunt (1827-1910)が、後年若き日のラファエル前派活動を振り返り回想的に綴った*The Pre-Raphaelitism and the Pre-Raphaelite Brotherhood* (1905)のなかで、ラファエル前派が範としたラファエル以前の画家としてBenozzo Gozzoli (1420-1497)に目を向けていることが考えられる。当時Carlo Lasinio(1759-1838)の版画によって知られていたピサのCampo SantoにあるGozzoliのフレスコ画は、Elizabeth Prettejohnが指摘するように、その後ラファエル前派の活動を説明するときには必ずと言っていいほど言及されるのが常であった(27-8)。しかし、例えば1865年の*The Nation*を紐解けば、Rossettiをラファエル前派の中心人物とする批評のなかで、推定されている彼らが手本としたラファエル以前の画家とは、Gozzoliではなく、Giotto (1266-67/1276-1337)、Cimabue (before 1251-1302), Perugino(c.1450-1523), Angelico(c.1400-1455)であることが確認され(273-274)、Huntの主張とはいささか齟齬をきたすことがわかる。

次に筆者はこれらのイタリア中世期の画家の中で特にGiottoとCimabueに注目したいと考えるが、それはこの二人の画家の解釈を巡ってRossettiの絵画と同時代のラファエル前派風絵画、Frederick Leighton (1830-1896)の絵画、との相違が鮮明になると思うからである。RossettiがDanteの文学に深い共感を寄せるのはDante同様Exileとなった父の影響を多分に受けたものと推定される。イタリアのナポリ出身であるRossettiの父Gabriele (1783-1854)は、ウィーン体制後復活した列強によるイタリア支配の中で、憲法制定を支持する詩を作成したことにより、オーストリア軍の弾圧を避け、ロンドンに亡命した過去をもっていた²。息子であるRossettiは亡命後ダンテ研究にいそしんだ父の影響を多分に受けたと考えられるが、そのDanteが同時代の画家として高く評価したのがGiottoであり、Danteが*Divine Comedy* (c.1310-14)の煉獄編十一歌でGiottoとその先人Cimabueを比較してGiottoを高く

評価したことは知られている³。

RossettiはGiottoの詩を翻訳し⁴、またGiottoがDanteの肖像画を作成したことに想を得て*Giotto painting the portrait of Dante* (1852)と題する絵画を制作しているが⁵、彼の制作態度はFrederick Leightonの*Cimabue finding Giotto in the Field of Florence* (1850)と比較することによりさらに明確になるだろう。LeightonにとってCimabueやGiottoを画題に選ぶことは制度攪乱的とは見做されなかった。その証左として彼は1855年のロイヤル・アカデミー展に*Cimabue's Celebrated Madonna is carried in Procession through the Streets of Florence; in front of the Madonna, and crowned with Laurels, walks Cimabue himself, with his Pupil Giotto, behind it Arnolfo Di Lapo, Gaddo Gaddi, Andrea Tafi, Niccola Pisano, Buffalmacco, and Simone Memmi, in the Corner Dante*を出品して名声を得ており、また78年にはアカデミーの会長に選出されるからである。しかしこのことに関して結論を下す前に大英帝国の嗜好に合致した画家であるLeightonが、同時にオリエンタルな眼差しをもった絵画を制作していることもまた考慮に入れねばならない。

一方Rossettiは、*Ecce Anchilla Domini!*で批判を受けて以来、公の場で作品を発表することを控えたときれ、先述したDanteを描くGiottoの絵も公開されていない。しかしRossettiとLeightonの創作時期はほぼ重なり、*Cimabue's Celebrated Madonna*もまた、題名から察せられるようにGiottoおよびDanteとの関連が示されている。またLeightonは1864年*Dante in Exile*を公開している。

これらのことからRossettiとLeightonの中世期イタリアへの関心は、彼らが帝国内で占める位置に加え、当時のイタリアの国情、および国内におけるDante評価にも目配りして考察する必要があると思われる。今回入手した1865年の*The Nation*誌にもDanteの生誕600年にちなんだ“Dante in 1865”と題する記事があり、Vincenzo Bottaによる*Dante as Philosopher, Patriot, and Poet*の出版が伝えられていた(440-442)。そうした中においてRossettiの翻訳詩集、*The Early Italian Poets*は、初期イタリアの詩を概観する初の試みであるその独創性と、確かな理解力、表現力に支えられ概ね高い評価を受けていることが今回確認された。ただし訳詩がeroticと評されていたことに関しては今後更なる研究が必要と思われる⁶。

(2) ラファエル前派とヴィクトリア朝のイギリス

——現代イギリスにおけるMillais評価を参考に——

先程ラファエル前派風の絵画を制作したLeightonがロイヤル・アカデミーの会長に就任したことに触れたが、ラファエル前派の画家と目された後、アカデミー内へと活動の場を移した画家にJohn Everett Millais (1829-1896)がいる。Tate Britainで会期中であったMillais展は、Rossettiとの比較においても、また現代イギリスのラファエル前派評価を知る上でもまさに時宜にかなった企画であった。没後の回顧展(1898)以来初めて開催された大規模な展覧会であるこの展示の特徴は、Millaisの生涯にわたる作品をPre-Raphaelitism, Romance and Modern Genre, Aestheticism, The Grand Tradition, Fancy Pictures, Portraits, The Late Landscapeの7つのセクションに分け、主にRealismとAestheticismの両側面から読み解こうとしたことにあった。

John Ruskin(1819-1900)が批判の渦中にあったラファエル前派を評し、ラファエル前派は自然を描いていると擁護したことはよく知られているが⁷、今日なおMillaisを評価する際に用いられるのが同じ解釈であったことは興味深い。展示ではRuskinが述べる「自然」があるときはRealismとして、またあるときは自然描写として、後年に至るまで継続して展開されたように見受けられたが、彼の風景画は、印象派の先駆とも言うべきJ.M.W.Turner (1775-1851)の風景画を経た世代であるのも関わらず、Turner以前のそれに近い。同様にMillaisが描いた女性群像は、19世紀末の唯美主義を奉じるものとして解釈される一方で、一世代前のアカデミー絵画、Joshua Reynolds (1723-1792)やThomas Gainsborough (1727-1788)の伝統に近いことが指摘されていた。

Millaisの本領はやはり初期のラファエル前派としての活動に集約されているとの感を新たにしながら、ラファエル前派としての真骨頂を示すMillaisの絵画は、*Christ in the House of His Parents* (1849-50)である(Fig.1)。Charles Dickens(1812-1870)によりオックスフォード運動との関連を指摘され批判を受けたこの絵は⁸、今回展示された下絵を見ると、画面右手奥に布を口にした神秘的な女が描かれていたとわかる(Fig.2)。展覧会図録に掲載されたAlison Smithの説明によれば、これは聖母の所作を補完するものである(45)。一方完成された作品では右端の女の姿は消え、また聖母の所作も明確に示されていない。その代わりにキリストの祝福の所作が明らかとなるので、この二つの絵を合わせると布を口にした聖母をキリストが祝

福することになりカトリックの典礼のような図となる。Smithはさらに当時のオックスフォード運動批判の背景として、1850年に教皇Pius IX (1792-1878, Pope 1846-78)がイングランド内のカトリック教会領を回復したことを挙げているが(46)、Millaisのこの絵をラファエル前派の枠組み、特にRossettiとの関わりで考察するとき、イタリア統一運動におけるPius IXの立ち位置は重要と思われる。

Dickensはまた聖家族を表現するのに、社会的害悪を具現化するような醜悪なモデルを採用したことを指摘しており、彼の指摘は今回入手した1850年のThe Builderにおけるロイヤル・アカデミー評によっても繰り返されていた(255-256)。特にThe BuilderはMillaisが幼いイエスを赤毛のユダヤ人少年として描いたことに読者の注意を喚起し、ここにExileの問題を提起していると思われる。

この頃のRossettiの絵画に目を転じると、僅か二月ほど前に公開された*Ecce Ancilla Domini!*の聖母もまた赤毛であった。その後彼は赤毛のモデルとして後に妻となるElisabeth Siddal(1829-1862)を見出しており、Exileの表象として赤毛を用いた公算が大きい⁹。

ExileはまたRossetti自身の姿でもあった。彼の作品が公開された場合は、*The Girlhood of Mary Virgin*の場合も*Ecce Ancilla Domini!*の場合もFree Exhibitionであったし、後者の絵を評したThe Builderの論者は、この展示会の出品者について所属を持たない芸術家集団と指摘している(184)。このことは同じくラファエル前派の画家のうちでもMillaisやHuntと決定的に異なる点であった。

従ってRobert BuchananによるRossettiの*Poems*批判は、Exileの抵抗の観点から再考が必要ではなかろうか。今回調査のための準備を通して判明したことだが、*Poems*に関する批評が多く、論争が長く続いた一つの要因として、*Poems*は常にない速さで再版が重ねられたことが挙げられる。この書は1870年の4月に第一版が出版された後、5月に第二版、6月に第三版、8月に第四版、12月に第五版が出されており、Buchananの批判を待つまでもなく市場操作が行われたのではないかと疑念は拭えない。

この問題は猥褻文書の郵送および受取を禁じる1865年のMail Actの施行後起きたAlgernon Swinburne (1837-1909)の*Poems and Ballads* (1866)批判、1873年のComstock Lawを予感させるHarriet Beecher Stowe (1811-1896)のByron批判とも合わせて考察する必要がある。また今回判明したことだが、当時の雑誌の販売はイギリス国内に限定されていない。Rossettiの



Fig. 1 'Christ in the House of His Parents' or 'The Carpenter's Shop' (1849-50)
<<http://www.tate.org.uk/servlet/ViewWork?workid=9523&searched=13737>>



Fig. 2 Study for 'Christ in the House of His Parents' (c.1849)
<<http://www.tate.org.uk/servlet/ViewWork?workid=9530&searched=13737>>

Poems 批判の背後にあったものは、大英帝国の市場拡大に支えられた批評のグローバル化にあったのかもしれないが、紙面の都合もあるので今後の課題として改めて詳細に論じたい。

(3) 帝国の視座——日本に対する眼差しを参考に——

今回 Rossetti に関する雑誌資料を収集する過程で、1852年の *British Quarterly Review* の中にイギリスが国際政治における日本の動向に目配りを怠らなかつたことを示す書評に遭遇した。それは1850年に上梓された Thomas Rundall 編集の *Memorials of the Empire of Japan in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* に関するものである (48, 67-74)。前掲書評は鎖国へと至った日本の背景として、ローマ・カトリックによる布教活動、対日貿易権を巡るスペインとポルトガルの闘争を挙げている。また開国が日本の国益にならないことを指摘した上で、翌年に控えたペリーの浦賀来航を正しく予見している。

このことから British Museum の Japan Room においては他のアジア諸国に関する展示物との比較から日本に対するイギリスの視座について考察した。その結果次のことが明らかとなった。同 Museum において、イギリスがかつて大英帝国として君臨した他のアジア諸国の展示は概して収集の過程が示されずに主に美術品、骨董品として展示されるきらいがある。それに対して1990年に設置された Japan Room の特徴は、展示物を歴史的な文脈におくことにあった。ただしその中において日英同盟(1902)は、「国際関係と植民地政策」の部門で間接的に示唆するに留められている。帝国の視座とは自らの行為を歴史的な文脈におくことを拒むと同時に他者の歴史的背景を奪取するものではなかろうか。仮にそうだとすれば、ラファエル前派が自らラファエル以前のイタリアに範を求めたことは、現体制

に対する強烈な批判となり、ナショナリズムへの抵抗の意味でも非常に重要である。

4. 結び

本海外調査研究は、19世紀および現代イギリスにおけるラファエル前派の評価から、ラファエル前派における Rossetti の独自性、大英帝国内の Exile との視点を得ることに貢献した。またラファエル前派主義を社会的、歴史的な文脈におく重要性を確認した意味でも大変有意義であった。今後さらに国内外の資料を補完した上で考察を深めていきたい。なお今回の研究成果は「D.G. ロセッティとダンテ研究——F. レイトンとの比較から——」(仮題)、「く両親の家のキリスト」の背景にあるもの——ラファエル前派とオックスフォード運動」(仮題)、「D.G. ロセッティと批評のグローバル化——R. ブキャナンによる『詩集』批判の背景——」(仮題)等のテーマに基づき日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本英文学会関東支部、日本英文学会等にて発表、投稿論文に反映させた後、博士論文の一部として提出予定である。

註

1. 江澤美月「明治時代のラファエル前派主義—D.G. ロセッティの『詩集』受容の背景—」『文化表象の政治学—日韓女性史の再解釈』お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア(F-GENS)プロジェクトD「理論構築と文化表象」2007年8月24日 pp. 36-43
2. William Michael Rossetti, *Dante Gabriel Rossetti: His Family Letters with a Memoir* Vol.1 (N.p.: Elibron Classics, 2006) 7-8.
3. ダンテ『神曲』平川祐弘訳 河出書房新社 1994年

p.166, 407

4. Giotto Di Bondone, "Canzone. Of the Doctrine of Voluntary Poverty," Dante and His Circle: With The Italian Poets Preceding Him trans. Dante Gabriel Rossetti (N.p.: Kissinger, n.d.) 147.
5. Treuherz, Julian, Elizabeth Prettejohn, and Edwin Becker, Dante Gabriel Rossetti (London: Thames & Hudson, 2003) 157.
6. cf. "Early Italian Poets," The Saturday Review 19 Apr. 1862: 449.
7. John Ruskin, "Pre-Raphaelitism," The Complete Works of John Ruskin Vol.12 (Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1990) 357-358.
8. [Charles Dickens], "Old Lamp for New One," Household Words Vol. 1 (Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1989) 265-267.
9. Lucinda Hawksley, Lizzie Siddal (New York: Walker & Company, 2006) 4 n.3.

参考文献

- Chapman, Alison and Joanna Meacock. A Rossetti Family Chronology. (New York: Palgrave Macmillan, 2007).
- Ghose, S.N. Dante Gabriel Rossetti & Contemporary Criticism. (N.p.: Norwood, 1977).
- Newall, Christopher. The Art of Lord Leighton. (London: Phaidon, 1999).
- Prettejohn, Elizabeth. The Art of the Pre-Raphaelites. (Princeton: Princeton UP, 2000).
- Rosenfeld, Jason & Alison Smith. Millais. (London: Tate, 2007).
- 藤沢道郎 『物語 イタリアの歴史—解体から統一まで—』中公新書 2005年

えざわ みつき／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

江澤美月さんは博士論文においてポストコロニアル・フェミニズムの視点から、大英帝国と明治期日本のラファエル前派の受容・流通の相関性を分析し、近代化において性と国家を軸にいかに関係が表象されてきたかを考察しようとしており、日・英の比較においても、また絵画と文学の連動性においても大変興味深い研究である。今回の調査では、日本で入手困難な当時の書評や絵画評の一時資料を閲覧調査し、ラファエル前派のうち、とくにダンテ・ガブリエル・ロッセッティによるダンテ研究の重要性を、脱コロニアリズムの観点から検証しうることを確認した。国境をまたぐ文化受容の連鎖が、国民国家の文化倫理と交差する地点を検証するうえで意義深い調査であり、理論構築のためにも、さらなる調査検証が待たれる。

(人間文化創成科学研究科 教授 竹村 和子)